SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

国連工業開発機関（UNIDO）東京事務所長
安永 裕幸

未来を変える

日本の若い世代の環境への意識は？

今回は、私が大学で担当している講義（環境問題と経済・産業）の中で感じた、今の若い世代の環境に対する意識についてお話しすることにしたい。

15回の講義をするとなると、やはり一つの「体系」というものが必要である。私が担当している講義の受講生は大部分が大学入りたての1年生であり、数カ月ほど前までは高校生だったわけである。彼らには、なるべく身近な問題を扱いつつ、環境と経済、環境と社会というものについて包括的な理解を持って貰いたいと考え、「（海洋）プラスチック問題」「地球温暖化」「産業公害と経済」という三題噺（さんだいばなし）を柱として、さまざまなトピックを盛り込んで、なおかつ英語、オンラインで講義を毎週行っている。

プラスチック廃棄物で私が学生たちにまず見せたのは、何枚かの写真である。この問題でよく話題に上る「漁網に絡まるウミガメ」「洗剤の蓋（ふた）を住処とするヤドカリ」等も勿論取り上げたのだが、それよりも印象的なものは1955年の米国雑誌「Life」に登場した「若い夫婦と女の子が『大量消費・大量廃棄』時代の米国を象徴するかのようにプラスチック製の食器やトレイを空中に投げ捨てている写真」である。わずか60年余り前の我々の先達は、将来プラスチックがこのように重大な環境問題を引き起こすとは考えていなかったわけであろう。これには学生たちも大いに衝撃を受けていたようである。

今の学生たちは、環境保全に対する意識は概して高い。私は、7月1日のレジ袋有料化以降も店頭で「あ、袋下さい」等と言ってしまう模範的と呼べない大人であるが、彼ら彼女らはマイバックはおろか、マイ箸やマイマグカップまで持参してのキャンパスライフであるらしい。

温暖化については、極めて関心が高い。18歳、19歳の若者でも、彼らの子供時代と比較して極端な天候（猛暑日、ゲリラ豪雨等）が増えていることが、科学的な根拠は別としても潜在的な脅威として映っているようである。私は、当然、IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change）による地球科学的な見方や、再生可能エネルギー、省エネ、CCS（二酸化炭素回収・貯留）、水素等の新技術についても説明した上で、グレタ・トゥンベリさんの国連気候行動サミットでの演説も全文読ませてみた。レポートを課してみたところ、多くの学生が「過激な表現や、時として極端に走って終末論的な見方を示すのは、理解できにくい部分もあるけれど、何より多くの若者の共感と行動を喚起したことで、大きな存在感を示している」という評価を彼女に与えていた。

海洋プラ、温暖化、極めて関心高く

問題意識 喚起

彼らの感覚を大切に

私は講義の中で、「環境と経済の関係」や「技術進歩の役割」については、彼女とその他の有識者の間で理解の乖離（かいり）がある、という話もしたが、「問題意識の喚起」という意味では、彼女は特に世界の若い世代に大きなインパクトを与えたと思う。私は「若者は怒る権利がある」と考えているし、地球温暖化の問題の解決を困難にしている理由の一つが、「将来世代のために現世代が再生不可能資源（地球環境）をどこまで利用（消費）することが許されるか？」という「有限資源の世代間の最適配分」の問題である以上、この若い人達の感覚は大切にしていきたいと考えている。

海洋プラゴミ問題は深刻の度合いを増す（インドネシア・ボルネオ島、ブルームバーグ）

やすなが・ゆうこう　86年（昭61）東大院工学系研究科修士課程修了、同年通商産業省（現経済産業省）入省。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）企画調整部総括課長、経産省産業技術環境局研究開発課長、同原子力安全・保安院ガス安全課長、資源エネルギー庁資源・燃料部鉱物資源課長を歴任。13年大臣官房審議官、15年産業技術総合研究所理事・企画本部長などを経て、17年から現職。06年博士（工学）。